**セッションB 「アーレントとヨナスの思想的交錯」**

世話人：百木漠（立命館大学）

報告者：戸谷洋志（大阪大学）、百木漠（立命館大学）

討論者：木村史人（立正大学）、田中智輝（山口大学）

司会者：渡名喜庸哲（立教大学）

　本セッションでは、これまで注目されることの少なかったアーレントとヨナスの思想的関係をテーマとした討議を行い、両者の思想を比較することによってどのような思想史的意義および現代的意義を取り出すことができるかを検討した。本セッションはzoomを用いて開催され、約35名が参加した。

アーレント研究者である百木とヨナス研究者である戸谷は、数年間をかけて共同研究を行い、両者の思想的影響関係について考察を重ねてきた。百木と戸谷はその研究成果を『漂泊のアーレント　戦場のヨナス』（人文書院、2020年）にまとめて上梓した。本書では、アーレントとヨナスの生涯と思想を並行して描き、両者が学生時代から晩年に至るまで深い友情関係に結ばれてきたこと、また特にアーレントの晩年には二人が互いに思想的な影響を与えあってきたことを明らかにした。本セッションでは、本書の出版を踏まえたうえで、改めてアーレントとヨナスの思想的意義について討議した。

　百木報告では、アーレントとヨナスの思想比較について、両者の基本的関係や先行研究の整理などの研究背景が説明され、そのうえで、戸谷との共同研究の概要と目的、方法についても報告が行われた。研究方法のひとつとして、百木と戸谷はコンスタンツ大学のハンス・ヨナス・アーカイブとコンタクトを取り、アーレントとヨナスの往復書簡をはじめとした関係資料を取り寄せ、これを翻訳・検討した。その結果、二人が晩年に至るまで親しい交際を続けていたこと、両者の論文や著作草稿について意見を交換していたことなどが明らかになった。具体的にはヨナスの「視覚の高貴さ」論文への評価がアーレントの『精神の生活』の執筆に反映されたり、ヨナスの『責任という原理』の草稿に対してアーレントがコメントをし、彼女の「出生」概念が取り入れられたりするなど、相互の影響関係が確認された。

　戸谷報告では、共同研究の成果が四点に分けて報告された。具体的には、（1）両者の戦争体験がその後のそれぞれの思想形成に影響を与えたこと（「漂泊」と「戦場」の対比）、（2）両者がともに「出生」に希望を見出しており、それぞれにその出生思想が神学的背景を持っていたこと、（3）両者が戦後ともにテクノロジー論に強い関心を寄せていたこと、ただしその問題に対する解決をアーレントは意見の交換（討議）に見出そうとしたのに対して、ヨナスは未来世代への責任という普遍的倫理の確立に見出そうとしていた点で差異が認められること、（4）ヨナスの「流転と静止」論文について、アーレントが書簡上でコメントを行い、その記述が『精神の生活』第１部第4節に反映されていること、これはアーレントの思想にヨナスが影響を与えたと思われる数少ない事例であること、などが説明された。

　これに対して、木村コメントでは『漂泊のアーレント　戦場のヨナス』を評価するコメントに加えて、以下の疑問が呈された。

問1 「アイヒマン裁判」のヨナスの思想への影響関係(の有無)が、史実的に追跡可能な仕方で与えられているのか。

問2 史実的に追跡可能でないとしても、たとえば『生命の哲学』や『責任という原理』のうちに、その影響を読み込むことはできるのかどうか。

問3 「死の存在論」における「ニヒリズム」に陥っていたというハイデガーないしは当時の人々についての評価は、ヨナスなりに当時の人々の政治的に誤った思考(判断)を理解しようとする試みといえるのか否か。

問4 問3がある程度妥当な理解であるとすれば、「死の存在論」(とそのニヒリズム)に陥ることで、なぜ政治的な思考(判断)を誤るのか。

問5 孤独における思考の中にも、政治的に正しい思考(アーレントの/政治理論的な思考?)とそうではない思考(ハイデガーの/哲学的な思考?)があるということになるのではないか?あるとすれば、政治的に正しい思考を可能にする条件とは何か?

問6 『人間の条件』の一部の記述11は、「複数性」の成立を所与で当たり前の事柄としているようにも読めるが、それを真に受けてよいのか。つまり、「複数性」は所与のものではなく、改めて構成されねばならないような、努力目標なのではないか。

「全体的テロル」の指摘は、たとえ政治的な領域において複数の人々が存在したとしても、複数性が減殺されうることを示しているが、実は人類の歴史において、「複数性」が成立していた /しやすかった時代・場所はそもそも稀であるのではないか。

問7 「全体的テロル」や「全体主義的テクノロジー」が登場する以前より、複数性は実現を阻まれていたというべきだとすれば、複数性が発揮できる共同体はいかにすれば実現できるのか。

問8 ハイデガーの思考は、「共(Mit)」を前提とした非複数的な思考であり、それゆえに彼は政治的 な事柄を適切に思考することが困難だったのではないか。それに対してアーレントが『精神の生活』で析出しようとしていた「一者の中の二者」としての「思考」や「あらゆる人」の眼差しを想定したうえでの「判断」とは、「共」に対する〈差異〉を生じさせつつ、その〈差異〉においての、孤独でありながらも複数的な思考(活動についての思考)であり、その点で哲学者（ハイデガー)の「共」における思考とは異なるのではないか。

これに対し、戸谷からは、ヨナスのテキストにアイヒマン裁判の直接的な影響関係は読み込めないこと（問1・2）、ハイデガーの死の存在論は「か弱い身体」に対する配慮を欠いているがゆえに政治的判断を誤ったとも考えうること（問3・4）、百木からは、ハイデガーの思考に比してアーレントの思考が孤独のうちに複数性を持ち込んだものであること（問5・8）、アーレントの思想では出生の時点で唯一性が認められるが、その唯一性が活動と言論において改めて複数性として実現・確証されると考えられること、などが限られた時間の中で回答された。

続いて、田中コメントでは教育思想の観点から、以下の疑問が呈された。

問1 全体主義とテクノロジーの危機に抗する可能性を「出生」に見出しているという点ではアーレントとヨナスは共有している。だが、二人が提起する「出生」の含意は大きく異なっており、とりわけアーレントが「第一の出生」と「第二の出生」を分けて考えたことの意味は看過できないように思われる。「アーレントの出生論においては生物学的な 誕生と政治的な始まりは直接的に結びついている」とまで言えるのかについて疑問が残った。

問2 ヨナスの場合、出産は「人類の存続への責任」において奨励されるものと考えられる。しかし、アーレントについてどうだろうか。アーレントは子どもが生まれるということを端的な事実として捉えており、産むことについても同様に扱っているように思われる。ヨナスの責任論が出産の奨励までを要請するのに対し、アーレントは「世界」への責任はあくまでも生まれた子どもの保護が要請されるにとどまる。「出生」の捉え方の差異は、両者の責任論の射程にも関わっているのではないだろうか。

問3 ゾーエー的な生とビオス的な生を対置し、後者おいて政治的存在としての人間を基礎づけているという点で、アーレントにもハイデガーに向けられたのと同様の批判が向けられるのではないか?

問4 ヨナスにおける「存在論的命令」は、人類が実在し続けることを義務づけることによって、かえって自然現象に対する人間の暴力を倫理的に無謬なもとすることを許容してしまわないのか。

問5 概して、アーレントにおいて教育は子どもを「世界」に導くものであり、その責任を直接に負う教育者は「世界」からのエージェントとして位置づけられる。対してヨナスの場合には、人類の存続への責任という点では保育や福祉に力点が置かれるように思われる。他方で、教育は個別的責任として親に帰属するものと捉えられるのか?

問6 アーレントは教育は本来的に「過去への態度」を必要とするとして、過去の出来事を知り、理解することが「世界」への参入を準備すると述べている。ヨナスの場合には、責任の主体を準備するという点で教育には何が要請されるのか。たとえば、彼が未来への責任の主体に求めている「想像力」は教育可能なものなのか?

　これに対して、百木からは、アーレントにおける「第一の誕生」と「第二の誕生」を区別しつつも、アウグスティヌスを経由したキリスト教思想を背景に持つ「出生」思想においては、二つの誕生が連続しているとも考えられること（問1）、ヨナスの責任が人類の存続を至上目的とするのに対して、アーレントの責任は世界の存続に向けられたものであること（問2）、戸谷からは、ヨナスは教育について直接的には論じていないが、親も含めた大人が子供を保護し導く責任を担うこと（問5）、人類および生命全体の存続への責任を担う倫理的な主体を準備する責任があると考えられること（問6）、などが回答された。

　その他にも活発な質疑・討議がなされ、セッションは盛況のうちに終了した。